

日本IT書紀

075 それぞれの戦争

05 淹滞篇
卷之十 焦土

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第七十五

それぞれの戦争

一

第二次大戦の前にもインターネットが存在した——といえは、誰もが「そんなバカな」というに違いない。

インターネットの前身は、第二次大戦後、対ソ核戦争を意識したアメリカ合衆国で誕生した「ARPANET」である。一九九〇年代に入ってその技術が民間に開放され、こんにちの社会インフラになった。

だが、不特定多数の人が個々の識別コードを持ち、国境を超えて、互いに自由な情報の交換を行った、という点では、インターネットと同じ機能を備えていた。いや、情報の伝達がワイヤレスで、しかも音声で行われたという点で、インターネット以上であつたかもしれない。

それは何かというと、無線電話、つまり「ハム」であつた。

無線通信は一八九五年（明治二十八）にイタリアのグリエルモ・マルコーニが開発した。

当初はモールス信号と同じく、「ツー・トン」の電気符号だった。これを音声通信に変えたのは、日本の通信省電気試験所に勤務していた鳥潟右一、横山英太郎、北村政次郎の三人の技術者である。

一九一二年（大正一）にその技術を開発し、二年後に船舶との交信に実用化した。原理はラジオ放送と同じだった。不特定多数を相手にした片方向の電波をラジオと言ひ、特定個人の間で交信された双方向の電波を無線電話と呼んだ。ラジオ放送の試験電波が発せられたのは一九二四年（大正十三）一月、公に認知されたのは「放送無線電話に関する規則」の公布によつてゐる。それを機に同年一月に大阪朝日新聞社が関西で、四月に東京朝日新聞社が首都圏で、さらに五月に大阪毎日新聞社が無線電話の公開実験を行った。

政府は国防の観点から電波管理を徹底しようとしたが、東京や大阪の学生、若手の電気技術者などが無許可で自前の局を開設し、勝手に電波を発信し始めた。アマチュア無線が始まったときだった。この中に、のちのソニーの井深大、NHK中央研究所長・島茂雄などがいる。

一九二七年（昭和二）九月、通信省は「短波私設無線電信電話実験局」の名称で全国のアマチュア無線九局を認可し、ワシントン条約に調印した二八年を境に積極的に無線

通信技術者を育てようとした。外洋航路や遠洋漁業の船舶との交信を円滑に行う必要性が生じたためだった。

満州事変を契機に、政府はアマチュア無線家を国防に役立てるべく、「国防無線隊」や「愛国無線隊」を発足させた。関東の「国防無線隊」の隊員は東京・赤坂の通信・電波兵器関係の部隊に一室を与えられ、軍用機器の修理、送信機・変調器などの製作、各地の通信所の整備、技術指導を行ったという。また各地で行われた防空演習に、毎年十五人から三十人が参加した。

その後、日米開戦とともにアマチュア無線は禁止され、個人所有の通信機は電波監理局職員の手で封印されていた。

「なにぶんの通知あるまで使用を禁止する」

と通信機に封印された人が大半だったが、無線機や部品を供出させられたり、また、買い上げられたケースもあった。最初のうち、政府はかなり高額で買い上げたりしたらしい。

無線電話愛好家たちの多くは、その技術を見込まれて研究開発や前線で働いている。

波長が合いさえすれば電波は遠く海外でも受信できる。

政府がどんなに情報を規制しようとしても、無線電話愛好家だけは海外の情報を肉声で入手していた。

大日本帝国政府は連合国に向けてポツダム宣言無条件受諾の電波を発信したのは、一九四五年八月十四日である。国内ばかりでなく、戦地にいた多くのハムたちが、手作りの無線装置でその電波を受信していた。

「日本がポツダム宣言を受諾した」

「戦争に負けた」

という情報は、彼らによって中国の荒野やジャングルの奥地の日本兵に伝えられていった。

二

日本アマチュア無線連合（JARL）が作成した資料に次のような逸話が載っている。

岡登博美は、一九四二年（昭和十七）一月に近衛輜重隊に入隊し、二月に北支に出征、終戦時は赤道直下のハルマヘラ島（インドネシア）にいた。

戦争末期となると

「電波の発射は危険ということで、無線機はもっぱら日本の海外放送を受信するだけだった」

「乾電池はたくさんあったが、補給路を絶たれたためにすぐに底をつき、手回し発電機を使った」

という。

また、八月十五日の玉音放送は

「聞き取れず、デマ放送（敵の放送）で終戦が華々しく伝わってきた」と書いています。

中島泰男は薬剤将校として旅順郊外の水師營の関東軍結核療養所に務めていた。勤務が終わると退屈なため、内地（日本）からラジオのキットを取り寄せて、炭火のハンダゴテで組み立てた。

「波長もいかげんであったが日本語が聞こえてきた」という。それは米国の日本向け放送「VOA」(Voice of America) だった。

「日本の大本営発表とまるつきり違う放送をひそかに毎晩楽しみに聞いていた。もちろん内容は外部に漏らさず、部屋を空けるときはラジオを隠して万全を期していた」

ある晩、放送を聞いていると隊長の少佐が入って来た。スイッチを切る暇がない。

「どうせデマ放送に決まっています」

という、その少佐は、

「そうではない。これは本当のことだ。日本はもう駄目かもしれない」

と言った。その後、しばしば訪ねてこられたので閉口したという。

石川舎人は中国・南京で地図伝送技術の開発を命じられた。現在のファクシミリである。前線を移動している部隊に位置を正しく知らせる必要があった。そのためには地図が伝送できれば便利である。

「電気することに詳しかろう」というのが選ばれた理由だった。

当時、日本では画像伝送の技術に早稲田大学の「円板式」と浜松高工の「電気式」があることが知られていたが、戦地なので文献がない。南京市内を探し回ったり上海に探しに行ったりした。

「月刊ラジオニュースに、テレビジョンの基本回路図が掲載されていた。それを見つけて読んだところ、トランス類を自作すればいいことが分かった。真空管など部品入手の見当はついた」と述懐している。

試作機が完成し、南京で実験した。

「山、川などの文字は一文字三センチほどの大きさであれば送信できた。ところが、地図となると道路や等高線まで送れなければ意味がない。結局、地図を送受信するには

至らなかつた」

という。開発用の機材もなく、技術資料もなく、電子部品もない中でそこまで作り上げたというのは感心するほかない。

従軍記者となつて戦地に出掛けたハムもいた。

柴田俊生は朝日新聞社の社員として、日本光音工業で作られた無線伝送装置を羽田空港から漢口へ運んだ。途中飛行機の故障から船便に替えて漢口に着いたものの、漢口攻略戦は終了してしまつたため間に合わなかつた。しかも電源の同期が取れず、また、出力の不足で交信に失敗した。

同氏は道中、上海、南京で、漢口で多くのハム仲間と出会い、「前線JARRL大会」を開催した。

その中の国澤忠次郎は一九三七年から朝日新聞社の報道班員として中国に二年間駐在し、現地状況を刻一通信で伝送し続けた。

「北支（済南、徐州、開封）の戦闘から中支（武漢、南昌など）に五百キロ近い移動で大変な苦しみを味わつた」と記している。

住吉正元は読売新聞社の特派員として武漢三鎮攻略戦に従軍した。武漢三鎮攻略戦は一九三八年十月から始まり、

漢口、武昌、漢陽の三都市を攻撃する作戦だつた。

同氏は上海から長江を七百キロさかのぼつた江西省九江で、中支派遣軍大久保部隊の大久保一億大佐に面会した。同大佐は昭和八年に行われた「関東大演習」に参加した「愛国無線隊」の隊長を務めていた。住吉はその隊員、つまりともにハムを通じた知り合いという間柄だつた。

彼らは連合国軍の間でやり取りされる交信を傍受し、あるいは連合国軍が日本に向けて発信していた謀略放送を聴いた。大本営の発表は戦場の実態と大いに異なつていた。こうした人々によって、地下水脈のように、戦争の行く方を察知するのに必要な様々な情報が兵士たちに流れていった。

三

のちにITサービス産業にその名を残すことになる何人かについて、戦中の様子を描いておく。

松尾三郎という通信省の技官がいた。

一九一三年（大正二）盛岡の徳平家に生まれ、姫路の松尾家の養子に入った。一九三八年京都帝国大学の電気工学科を卒業して通信省に入った。入省した直後、志願して海

軍に入り、技術中尉として潜水艦乗りの訓練を受けた。志願したのは

「徴兵で軍隊に行くより、最初から尉官として赴任すれば上級兵に殴られずに済む」

と考えたためだった。それほどに軍隊の鉄拳制裁は恐怖だった。

佐世保基地で軍艦の検査官として過ごしたのち、通信省に復帰したが、日米開戦後、今度は徴兵されて一九四一年、ジャワ島のスラバヤに海軍工廠を建設する指導将校になった。オランダが持っていた工場を陸軍が接収し、これを海軍の艦船の修理工場に転換したものだ。

そこで陸軍の兵士がオランダの技術者を犯罪人同様に扱っていたことに腹を立て、

「敵といえども人間ではないか」

と真っ向から喧嘩を挑み、工廠の技術者として活躍の場を与えた。海軍の青年将校の剣幕に、さすがの陸軍もたじたじになった、というエピソードがある。

「潜水艦の訓練中、艦の機関が故障してあやうく死ぬところだった」

というようなこともあった。

ややあつて本国に戻され、レーダーの研究開発に従事することになった。研究所は千葉県九十九里浜にほど近い松

尾という町だった。現在の地図でいえば山武市松尾町である。

「バラック同然の施設だった」

とのちに語っている。

研究に没頭しているうち、終戦となった。

終戦時、海軍少佐。

戦後は通信省に戻って研究所に勤務し、一九五三年（昭和二十八年）に日本電信電話公社、五四年にニッポン放送技術次長、五七年に日本電波塔取締役技術部長などを経て、東京オリンピックが開かれた六四年に日本ビジネスオートメーション（JBA）の社長に就任した。

その後、縁あって北海道ビジネスオートメーション（HBA）、キウウェア・ソリューションズの前身である日本電子開発（NED）、SCC、日本宇宙開発などを設立するかわら、電子開発学園、北海道情報大学などを創設して人材の育成に当たった。

この人物については、稿を改めて書く。

戦地に赴いていた人もいた。

のちにセンチュリ リサーチ センター社長・会長、情報サービス産業協会会長を務めることになる高原友生は、一九四四年（昭和十九）陸軍士官学校を卒業し、歩兵第五

十八聯隊に配属された。祖父は陸軍軍人、父は海軍少将という軍人一家だったから、軍人になることには少しも抵抗がなかった。

歩兵第五十八聯隊はその年の二月に発令された「ウ」号作戦に参加している。「ウ」号作戦は、のちに「インパール作戦」の名で知られる。

作戦はビルマの国境を越えて、インド北東部の要衝インパールを占領してイギリス・インド連合軍による中国国民政府（国民政府は重慶にいた）支援ルートを遮断することになった。投入兵力は第十五軍三個師団、総員十二万人だった。司令官は盧溝橋事件を起こした牟田口廉也で、このとき中将に昇進している。

ビルマ方面の制空権は、すでにイギリスに握られていたし、第十五軍に与えられた航空機は二百機に満たなかった。牟田口は短期にインパールを陥落せしめるには、自動車中隊百五十、駄馬輜重兵中隊六十が必要と申請したが、大本営が送ってきたのは自動車中隊二十六、駄馬輜重兵中隊十四に過ぎなかった。

作戦の序盤は順調に進んだが、四月に入って進軍が停滞した。アメリカが機械化部隊二個師団を派遣して日本軍の前進を阻んだほか、イギリス空挺ゲリラ師団が日本軍の補給を妨害した。ために日本軍の三個師団は総崩れとなり、

飢えとマラリア、チフス、赤痢に侵された兵士たちは、折からの雨季のぬかるみの中で命を落としていく。作戦中止が決定されたとき、第十五軍三個師団の戦死者は三万五百二人、傷病四万九千九百七十八人を数え、事実上、壊滅状態にあった。

この作戦でからも生き残った高原は現地で抑留生活を送ったのち、日本に帰還したが職業軍人であったために就職ができなかった。そこで改めて東大に入り直し、伊藤忠商事に入った。

四

そうした人物のうち、終戦時の軍隊における最高位だったのは、松尾三郎と並んで塚本祐造である。

彼は海軍横須賀基地の航空隊少佐として終戦を迎えた。実戦で零戦、雷電、紫電改に乗り、三菱重工名古屋航空機製作所が開発中だった次期主力戦闘機「烈風」の試験パイロットを務めていた。終戦のときは首都防衛航空隊隊長を務めていた。

戦後、ようやく就職した野原産業が倒産し、金井元彦（のち参院議員）の紹介で伊藤忠商事に入った。航空機部品の輸出入に従事したのがきっかけとなって、アメリカの

ベンディックス社が開発した計算機「BENDIX G-15」の輸入と販売にかかわり、一九五八年、東京電子計算センターの設立にかかわった。のちのCRCソリューションズである。

終戦の年、陸軍航空隊の奉天航空基地に二人の飛行学生が配属されていた。のちに富士通名誉会長となった山本卓眞、インテックを創業した金岡幸二である。

二人は連日の猛特訓を受けていたが、四五年七月、ついに「特攻」を命じられた。出撃がいつになるか定まらないうち、八月七日、ソ連がにわかに対日参戦の意思を明らかにし、同日、怒涛の勢いで満州になだれ込んだ。

日本の関東軍の敗勢は明らかだった。

山本卓眞は、二〇〇二年春の防衛大学校卒業式の来賓祝辞でこう述べている。

私たちは、八月の敗戦直後、部隊長島田安也中佐から、内地への帰還命令と同時に生涯忘れ得ぬ訓示を受けました。それは「どんな事があっても行き抜け、生きて祖国の再建に力を尽くせ」というものでした。私達は汽車で送り帰され、部隊長他はシベリアに連れ去られました。

ただ別の説もあって、

——二人が日本に帰還したのは八月十三日、汽車ではなく奉天基地にあった最新鋭の戦闘機だった。という。

その戦闘機は「キ-84」だった、とまで伝わっている。

「キ-84」は別に「烈風」とも呼ばれている。

奉天の航空基地に配備されていたのは確からしい。

「奉天から列車で帰れるはずがない」と言われれば、否定する根拠はない。

だが、当人が「列車で」と言っているのだから、そうであるかもしれないし、そうではなかったのかもしれない。そのことははやどうでもいい。

吉澤審三郎の長男で、戦後、吉沢ビジネスマシンの社長となる吉澤幹夫は、終戦の直前、海軍が秘密裏に開発していた特殊潜航艇「回天」の乗組員として広島の高島で訓練を受けていた。

「回天」は船首に強力な爆薬を仕込み、人間が操縦して敵艦に体当たりする自爆兵器で「人間魚雷」とも称された。あと数日、戦争が長引いていたら、彼の戦後はあり得ようはずがなかった。

このときの縁で「回天」の設計者である松田武彦（のち

産能大学総長」と、戦後を一貫して親しく付き合った。

北川宗助の甥で、のちに日本ビジネスコンサルタント（NBC）大阪営業所長、日本情報開発（NID）取締役などを経てスタット社長となる北川淳治は、横浜ヨットという会社の銚子工場で勤労奉仕に駆り出されていた。

ここでは「マルヨン」（〇四）と呼ばれた特殊舟艇を作っていた。ベニアでできた全長五メートル強の船体に自動車用エンジンを二基取り付け、船首に爆雷を積んで敵艦船に突入する特攻艇である。「震洋」の名でボルネオやフィリピンの戦線に投入された。

石原寿夫（のち行政管理庁を経て情報処理振興事業協会理事、ソフトウェア流通促進センター所長）は東京帝国大学出の陸軍大尉として、パプアニューギニアのブーゲンビル島守備隊に配属されていた。もっぱら事務方を担当していた。

ブーゲンビル島といえば南洋の鮮やかな花「ブーゲンビリア」の発祥地だが、太平洋戦争時はその上空で山本五十六が撃墜されたことで知られる。かつ、当時は「ブーゲンビル」と呼ばれ、「墓島」とも呼ばれた。ここで四万二千人が戦病死した。

「打ち返す弾もなけりや鉄砲もないんだもの。戦争なんてできるわけがない。食糧がなくて、兵隊は立っているのが精一杯でした。へび、カエル、ネズミなんかはご馳走でね、トカゲとかミミズなんかも食べた」

「マラリアとアメーバ赤痢で次々に倒れる。食べてないから体力がない。便所に行けるうちはいい。行けなくなったら死ぬ。便所に行くふりをして抜け出し、ジャングルの中に入って手榴弾で自決する兵士もいました。分かっても、止めることができなかった」

取材後の雑談でそういう話を聞いたことがあった。

連合国軍との陸上の戦いは四三年十一月から始まり、四年七月に守備隊主力の独立混成第三十八旅団が事実上壊滅した。降伏したのはポツダム宣言受諾から九日後の八月二十四日だった。

「復員船に乗り込もうとしたとき、アメリカ軍から足止めを受けたんですよ」

と、後年、その体験を語っている。

「大学で法律を専攻していました。そのことが分かって、日本軍の戦犯の弁護を命じられたわけでした。そうはいっても弁護士の仕事はまったく経験がなかったので、「戸惑いました」

アメリカ軍は日本軍の戦犯逮捕者に弁護士を付けること

で、公平な裁判のかたちを作った。だが、勝者が敗者を裁くという本質はまったく変わらなかった。

石原はしばらくアメリカ軍大尉に準じる扱いを受け、帰国したのは四七年になってだった。

~~~~~ 補注 ~~~~~

グリエルモ・マルコーニ 第二十九「電信」補注

鳥潟右一 とりがた・ういち／1883～1923。秋田県花岡村の農家に生まれ第一高等学校（東京大学教養学部）、東京帝国大学工科大学電気工学科から通信省電気試験所に入った。一九二二年（明治四十五／大正一）横山英太郎、北村政治郎ともに、TYK無線電話機を発明し、実用無線電話を実現した。また一九一七年には無線による双方向通話に成功した。

横山英太郎 よこやま・えいたろう／1883～1966。福井県三国町に生まれ、第一高等学校、東京帝国大学から電気試験所に入った。のち日本無線、国際電気通信の役員を歴任した。

北村政次郎 きたむら・まさじろう／1882～1933。一九〇四年（明治三十七）電気試験所に入り、鳥潟右一の下で無線通信による音声通話技術の開発に従事した。一九一四年から一六年にかけて、三重県の鳥羽、神島、答志島の間を結んで実験を繰り返した。二五年東京放送局（のち日本放送協会）に移って技師長となった。

島 茂雄 しま・しげお／1906～1993。第二次大戦前にNHKに電気技術者として勤務、終戦直後、山梨県韭崎の山の中にあった軍の貯蔵庫から中・短波受発信機を無断で持ち出し放送網の再構築に取り掛かった。ソニーの井深大とはハムを通じて知り合いだった。無線通信網の再構築を一緒に進めるうち意気投合し、のちソニー研究所に移籍した。

ハムコード アマチュア無線通信を行う者に付される認証・コード

ルサインで、日本に付された国際呼出符号と地域番号で構成される。ちなみに文中登場者のコードは、岡登博美＝J2NC、中島泰男＝J2NY、石川舎人＝J2MV、柴田俊生＝J2OS、国澤忠次郎＝J2NR、住吉正元＝J1ESだった。

日本ビジネスオートメーション JBAのち「東芝情報システム」と改称した。

北海道ビジネスオートメーション HBA：一九六四年四月設立。二〇〇四年七月「HBA」と改称した。

金井元彦 かない・もとひこ／1903～1991。兵庫県に生まれ、東京帝国大学を出て内務省に入った。第二次大戦後、行政管理庁を経て六二年から七〇年まで兵庫県知事、のち参院議員となり、七八年第一次大平正芳内閣で行政管理庁長官を務めた。八

〇年勲一等瑞宝章。

島田安也 しまだ・やすなり：「陸軍部隊最終位置」航空総隊リストに「第二航空軍直轄独立第一〇一教育飛行団第二六教育飛行隊隊長・中佐／陸軍士官学校三十八期」とある。

戦闘機「烈風」 れっふう：零戦を大型化して航行速度、航続距離を大幅に向上させた。加えて零戦の十二ミリ機銃四基と八ミリ機銃二基を、二十ミリ四基と十二ミリ二基に強化したもので、当時存在した戦闘機では最高かつ最強の性能を備えていた。一九四四年に制式採用され終戦まで三千四百八十八機が生産された。戦後、アメリカ軍が接収してテストしたところ、最大時速六百八十七キロ／時、高度六千メートルまでの上昇時間五分四八秒という高性能を記録している。

特攻潜航艇「回天」 かいてん：長さ十四・七五メートル 直径一・五メートル、総重量八・三トンで、艦頭に約一トンないし一・五

トンの爆薬が仕込まれていた。最高時速三十ノット（約五十六キロ）、巡航速度十ノットで最大二十三キロを潜水航行し、大型潜水艦に最大六基を搭載して敵艦隊に近づき、海中で発進した。判明しているだけで百四十五人の特攻兵が平均二十一・一歳の若さで戦死している。

**松田武彦** まつだ・たけひこ／1921～1999。

一九四三年九月東京帝国大学工学部造兵学科を出て海軍技術見習尉官となった。

# 日本IT書紀 075 それぞれの戦争

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。